

私の一冊

社会福祉学科 鈴木俊文 先生

せきしろ、又吉直樹著 『カキフライが無いなら来なかつた』

小鹿図書館 911.368/Se 39（幻冬舎）

1. 言葉で「意味」を伝える

本好きの僕は、生活のあらゆる場面を本と共に過ごしている。その大半は、授業の準備や研究で向き合うテキスト、専門書などが中心だ。しかし、ここ最近は提出レポートなどで目にする学生の「文章表現」に関心高く、「類語辞典」を眺める機会が多くなった。大学生活はとにかく書きものが多い。僕自身も学生時代に限らず、今でも漢字や国語辞典は欠かせない相棒だ。しかし、「類語辞典」を活用している人はどれくらいいるだろう。この辞典、実は非常に面白いのだ。

質的研究を専門としている僕は、ケア現場を舞台に、そこに立ち現われる現象を言葉におきかえる作業に膨大なエネルギーを注いでいる。つまり、見えるもの、感じとれるものすべてを「全体」として捉え、「まさにこれ！」という「言葉」で説明しようと力を尽くすのだ。例えば、目の前にいる人の歩行姿を「歩いている」と捉えるのか「力を込めて歩き始めた」と捉えるのか、あるいは「やっとの思いで一步を踏み出した」と捉えるのか。こうやって生まれてくる言葉は、単にヒトの動きを見ているだけではなく、状況の全体性や目には映らない人の「息遣い」みたいなものを捉えようとしなければならない。このような作業をとおして生まれる言葉を、質的研究では「概念」と呼んだりする。この「概念」を生成する時に、なかなか現実にフィットする言葉が見つからず「類語辞典」を活用することも多い。

「概念」とは、大辞泉によれば「物事の概括的な意味内容。事物の本質をとらえる思考の形式」などと説明されている。これを見ても何がなんだか……と思った人へ。次に類語辞典でこの概念の近くに存在する言葉や表現を調べてみよう。すると「観念」→「表象」→「哲」→「イメージ」などと続くものが目につく。「なるほど」と頷ける。表象からイメージへの流れを辿れば概念の理解が進む人も多いのではないだろうか。類語辞典、本当によく出来た辞典である。先日のゼミでも、「言葉探し」の機会があり、この類語辞典が話題となった。「愛」の隣は？なんていうロマンチックな鈴木ゼミ生の一言に、恥ずかしながらノリノリで調べてしまった。

2. 言葉で「日常生活」を表現する

ちなみに、我が家には6歳と4歳になる息子がいる。彼らとの触れ合いも「読み聞かせ」や「調べもの」など本はいつも身近にある。妻も随分と気合いの入った読書家で、我が家は年中読書月間だ。正確に数えたことはないが、定期的に利用している図書館の貸し出し冊数だけでも、2週間30冊ペースで、これが何年も継続中である。

先日、子どもと逆立ちをして遊んでいたところ、長男がそれを「マヨネーズだ！」と叫んで喜んだ。また、次男は布団に入った時に、曲げた膝がつくる、かけ布団の膨らみを眺めては「こんもりおやまがふたちゅ（二つ）」とウケまくっている。これはお気に入りのえほんから得た表現だ。日常生活にありふれた何気ない光景も、子どもの目線で豊かに表現しようとすると難しいことが多い。しかも、それをあえて表現するとかなり面白いことにも気づかされる。

大学生活を送るみんなの場合はどうだろう。言葉にする面白さよりも「苦しさ」に直面していることが多いのではないだろうか。今日現在、介護福祉専攻は介護実習中である。巡回に出向くと、そこでは「うまく説明できないんだけど…」「言葉ではうまく言えないけど…」という学生の声が続く。そして、その言葉に「つまり何て言うか…」と、今度は僕が言葉に詰まつたりする始末。このやりとり、これまでに何百回続けてきただろう。

医療・福祉に携わる仕事は、現場で向き合う人々との関わり合いや自分の経験を「言葉」で説明したり、記録に残す機会が実際に多い。これが出来なくては職務を全うすることなどできないといつてもよい。しかし、あたりまえにある日々を、あたりまえの言葉で、あたりまえに説明しようとする時、これが極めて難しいことを痛感する。ここで述べた「難しい」は、決して教科書を読めば「難しい」が解消するものを指しているのではない。むしろあたりまえ過ぎて意識しにくい日常経験、意識していたはずなのに言葉におき換えられない感覚や感情たちのことを指している。

3. カキフライが無いなら来なかつた

ここでようやく「私の一冊」の話につながっていく。あたりまえの日常をあたりまえの言葉で説明する難しさを痛感している中、この一冊に出会った。僕は、この本の著者を詳しく知らなかつたが、「カキフライが無いなら来なかつた」というタイトルに惹かれ、本を開くことなく購入してしまつた。その表紙の帯には歌人の穂村弘氏による『「無修正の心」をありがとう。』という言葉。本を開く前から、瞬く間にタイトルからこみあげるイメージが僕の中に膨れ上がつたのだ。こんなに心の動く経験は久しぶりで痛快だった。日常の何気ない経験、意識しているはずなのに言葉におき換えられない感情たち。この本にはそんなもどかしさを「笑って」救ってくれるヒントがある。ちなみに表紙の帯の続きには、以下の説明書きがあつたので紹介したい。

『妄想文学の鬼才と、お笑いコンビ「ピース」の奇才が詠むセンチメンタル過剰で自意識

異常な自由律俳句四百六十九句。散文二十七篇と著者二人の撮影による写真付き。文学すぎる戯言か お題のない大喜利か』

このように、本書は自由律俳句や散文を束ねた一冊だ。しかも、身近にありふれているにも関わらず「あえて」言葉になどしてこなかった感情や経験を「自由に」綴っているところに面白さと痛快さ(十刹那さ)がある。以下に僕の心に沁みた作品を少しだけ紹介してみたい。

「大人になったらと未だ思う」
「ほつれた糸を切ろうと引いたら伸びた」
「自分のだけ倒れている駐輪場」
「まだ眠れる可能性を探している朝」
「オハヨウが言えなかつたサヨナラは言おう」

以上、これを読んでイメージを描きながら「わかる。わかる。」と納得してくれた人は、作者の言葉から「伝わる」ものに「心の動き」を感じ取ったに違いない。言葉に心の動きが伴うと、実際に様々な表現を見出せる。携帯電話が手放せなくなった現代、言葉の予測変換機能などあたりまえとなった。メールを主なコミュニケーション法とする僕らは、伝えたい気持ちを言葉ではなく「絵文字」で表すことも実に多い。そんな時代だからこそ、何気ない日常を、あえて言葉にすることに大きな意味があるよう感じてならない。大学生活を過ごすみんなには、ぜひ一度この本を手にとり、今日の「私の」日常を言葉で表現してみてほしい。少なくとも、この本を読んだ後は、身近な出来事を言葉にすることが実に楽しく、愉快になる。そして、忘れていた「無邪気な自分の気持ち」がそっと顔をのぞかせるなんてこともあるかも知れない。

人の生活は、文脈を大切にして語ることで豊かな物語のようになるから魅力的だ。物語ることは、予測変換や絵文字を通り越した人間らしい「表現」を日常世界に見出すように感じられる。

4. おわりに

「カキフライが無いなら来なかつた」学校帰りの電車の中。休憩時間。辛いことがあった就寝前…。読む場所、読む日、読む時間がまた、別の意味を浮かび上がらせてくれるから本当に不思議だ。